

厚生労働省の国立社会保障・人口問題研究所が発表した人口推計によると、2040年の日本の総人口は1億727万で2010年と比して16・2%減少すると推定される。北海道では人口減少が全国と比較してより顕著で24・6%の減少となるらしい。道都札幌市も200万都市に達することなく、20万人減となり、私が住んでいる苫小牧市も4万人減で道の人口減少率とほぼ同じ20%強である。札幌市と苫小牧市の間位置する恵庭市は1,000人減で、ほとんど不変であるのに対して、苫小牧市に隣接する白老町は半減す

人口減少社会

情報広報部

橋本 洋一

るといった地域格差がみられる。2006年をピークに人口が減少に転じた。日本の有史以来、はじめての出来事である。このまま推移すると、今世紀末には、6,241万人に半減すると類推される。まさに人口半減時代への突入である。この人口減少は《高齢化》と《少子化》の両者が同時進行するために、2000年に「4人で1人を支える」体制だったのが、2050年には「1・5人で1人を支える」不安定な構造に変化する。

かつて「100年安心の年金」と時の政府は大見えを切っていたが、5年前に「あなたの年金は年間210万円支払われます」と連絡がきた。その2年後、190万円さらにその2年後、170万円と2年ごとに20万円目減りし、Y=210-10X(Y:支給金額、X:年数)という1次方程式が成立することになる。来年は150万、3年後は130万と目減りし、最終受取額が決定したと思いきや、年金受給年齢が引き上げられるといった状況が起きる可能性が十二分にあるのである。こういった状況では、現在支給されている高齢者の方のように年金で生活をすることは夢のまた夢ということとなり、年老いた身を鞭打って切り詰めた生活を送るといったバラ色とはかけ離れた人生が待っていることになる。

大阪での学会発表のため、神戸行きの飛行機に搭乗しようと、搭乗口に向かったところ、すでに優先搭乗が始まっていたが、老人クラブの方々の一行なのか、大勢の高齢者の方々が搭乗口に集まられ、搭乗がスムーズにいかず、搭乗手続きに思いの外時間がかかってしまった。今後、高齢化が進むとこういった搭乗風景がいつも至る所で見られることになる。優先搭乗者の中の高齢者が占める割合が急増すると、搭乗時間にかかる時間の増大を考慮して、新たな搭乗時間の設定が必要に

なるだろう。

社会のさまざまな設定の変更が余儀なくされるかもしれない。数年前に東京のホテルで開催されたある会でサントリーの佐治社長兼会長と臨席して、お話しをする機会があった。「高齢者社会を迎え、アルコール消費量が減ります。日本酒は最悪です。ビールもワインも減少傾向です。うちには『それから』という本格芋焼酎がありますが、それだけなんとか健闘しているといった状況です。これから我々は非アルコール商品に力を入れていかなければなりません」と述べられたのを思い出した。

人口減少社会の本質は《現在、未来の生産人口の減少》であり、その結果、アルコールのみならず、自動車、書物をはじめ、国内貨物の総輸送量の減少を招く事態となる。

高齢化は医療介護供給者の増員を必要とし、団塊の世代が後期高齢者の仲間入りする2025年には看護職員(190)と200万人)と介護職員(230)と250万人)の数が逆転し、その確保に四苦八苦する事態になることが予想される。複数の疾病を有する高齢者の増加は一般の専門医とは別の老年専門医の存在を必要とするだろう。2025年はわずか12年後のことである。

『ポスト団塊の世代』の一人である私も疾病予防といった(本音は家族から見放されないようにするといった)観点から、スポーツジムに通い詰め、日々、ランニング、エアロバイクトレーニングそして登山に励もうと悲愴な決意をした。